

[別紙①]

第2学年 道徳科学習指導案

1. 日時 令和5年 12月20日(水) 第5校時
2. 場所・学級 丹波市立青垣中学校 2年1組教室
2年1組A 計20名
3. 主題名 性的少数者の人権について
内容項目 【遵法精神, 公德心】
4. ねらい 実際に行われた裁判から新しい人権課題について考え、それぞれの立場に権利があることに気づき、自他の権利を大切に、偏見のない社会の実現に努めようとする態度を育てる。
教材 経済産業省に勤めるトランスジェンダーの職員が、職場の女性用トイレの使用を制限されているのは不当だとして国を訴えた裁判を取り上げる。

5. 主題設定の理由

本学級の生徒は、日常的に教え合いをよく行い、分からない人に分かる人が教え合う良い雰囲気がある。自分の意見を恥ずかしがらずに発言する生徒が増えつつあり、お互いの意見を受け入れ、それにつなげて自分の意見を述べることもでき始めた。しかしながら、発言する生徒に偏りがあるのが課題であるため、ペアトークや班活動といった少人数での発言しやすい環境からクラス全体への発表につなげていきたいと考えている。また、道徳の授業中の発言では、人を思いやることの大切さなどを理解する様子はいかがえるが、普段の学校生活でそれが実践できているとはいいいがたい。

本時の題材は、実際に経済産業省に勤めるトランスジェンダーの職員が、職場の女性用トイレの使用を制限されているのは不当だとして国を訴えた裁判である。身近に起きている問題から裁判にまで発展にしていることで、世の中のトランスジェンダーに対する問題意識が高くなっていることを理解させやすく、道徳の授業と普段の生活がよりつながっているとも感じられる教材である。前時に『中学道徳 きみがいちばんひかるとき』に掲載されている「民主主義と多数決の近くて遠い関係」を扱い、ある2つのものから1つを選ぶときに様々な視点から物事を考える必要性を学んでいる。今回扱うトランスジェンダーの問題も単純に2つの立場に分けて考えるのは難しいが、あえて前時の授業で学んだ視点を生かすために、最初に自分はどちらを支持するか決めさせて、2つの立場に分けて行って話し合いを進めている。そして、意見交流を通してそれぞれの人がもつ多種多様な価値観、異なる性別、人種、民族的背景がある中で「すべての人が生きやすい環境になるためには何が必要か」ということについて考えるきっかけにしたい。

この問題は非常にデリケートな問題であるため、子どもたちの中で結論を出すのが目的ではない。したがって指導にあたっては、生徒たちには様々な立場の人の視点に立ち、またその意見を聞き、話し合う機会をもつことの大切さを伝えたい。さらに、今回の授業はディベートのように意見をぶつけ合うのではなく、相手の意見を受け入れ、尊重しながら議論を進めていくようにする。その時教員自身も、どんな意見であってもまずはその意見を受け入れ、すぐに否定しない態度をもっておく。そして、相手を尊重して発言できたときや話法を使って発表することができたときにはすかさず褒める。また、生徒の発言内容を教員が繰り返すのではなく、生徒にキーワードを考えさせることで「聴く」態度を育てたい。そうすることで発表者に「自分の発表をしっかりと聞いてくれている」という安心感をもたせ、自他を尊重する学級づくりを行っていく。

6. 本時の展開（第1時／全1時間）

(1) 目標

実際の裁判から今の社会で起きている問題を知ること、すべての人が生きやすい社会とは何か考え、それぞれの立場の人権を理解し実践できるようにする。

(2) 展開

学習活動	指導上の留意点	評価とその方法
1. めあてを確認する。		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 0 auto; width: 80%;"> すべての人が生きやすい社会とはどのような社会か考えよう。 </div>		
<ul style="list-style-type: none"> ・裁判の内容を教員が読む。 ・裁判の概要を追加事項もふまえて全体で確認する。 	どちらかの立場に意見が偏らないように、2つの立場で迷うような助言を行う。	
<p>2. トランスジェンダーの職員側、経済産業省側どちらの意見に賛成か個人で考え、ワークシートに書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペアで出た意見を伝えあう。 ・ペアで出た意見を全体に向けて発表する。 ・発表の順番 <ul style="list-style-type: none"> ①トランスジェンダーの職員側2人 ②国側2人 ③その後はそれぞれの意見につなげて発表 	<p>どちら側でもないというのは選択させない。根拠を明確にして必ずどちらか決めさせる。</p> <p>前回の学びを想起させる。またそれに気付いたときには大いに認める。</p> <p>他の人の意見を聞いて自分の意見が変わることが決して悪いことではない。ただし、なぜ変わったのか根拠を明確にしておく。</p> <p>話法を使うよう促し、ディベートのような攻撃的な発言はしない。</p> <p>どちらの立場の意見か視覚的にわかりやすいように板書する。</p>	<p>意見を言ったり、他の意見をしっかりと聞いたりしているか見る。</p> <p>自ら発表できるか見る。</p> <p>他の人の意見を理解できているか見る。</p> <p>前回の学びを活かしているか見る。</p>
<p>3. 両者が納得するにはどのようにすればいいか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループになりそれぞれの改善策を考える。 ・クラス全体に向けて発表する。 	<p>現実的でない改善策でなくても認めていく。ただし、安易に改善案を数多く出しているときには、教員がその案が本当に最適かを尋ねる。</p> <p>他の意見から自分の意見を深められるよう促す。</p>	<p>積極的に話し合いに参加できているか見る。</p>
<p>4. 本時の授業をまとめる。</p> <p>本時で学んだことをペアでふり返り、今後本時のように何度も考えより良いものすべきことがないか考える。</p>	<p>単純な問題ではないので、結論はでない。ただこのように様々な人の意見を聞き、議論し続けることが大切だということを伝える。</p>	<p>日常の問題まで落とし込んで考えることができているのか見る。</p>

[別紙②]

R5年12月20日2年生道徳 「すべての人が生きやすい社会とは」 生徒感想

- 今日「すべての人が生きやすい社会」について考えました。トランスジェンダー職員の女性トイレ利用制限についての裁判を例に挙げて考えましたが、とても悩まされました。何に悩まされたかという、めあてに着目した時に、「すべての人が生きやすい社会」と書かれていたからです。今回あげられた例一つをとってもわかるように何か物事が起こるときには必ず相手もいるので、その相手にも自分にも強い思いがあります。だから、どちらもの思いに寄り添うとなると、解決しきらない問題が出てきてしまうこととなります。ですが、私たちに大切なことは、解決しないものを解決しないからと言ってほったらかしにするのではなく、どんな壁に直面しようとも、その解決しない難問に向き合い続けることだと今回の授業を通して気付くことができました。
- 授業時間内で結論が出る問題じゃないけど、自分と違う人の考えも知れたからこそ余計に悩む問題だったので、前の多数決の授業のように考え続けたいいけない問題だと思いました。『多数決』の時と同じように、多い方が正しいとも限らないし、だからと言って少数の方を認めてばかりでも今回のように不安に思う人の割合が多くなってしまう場合もあるから、どちらの立場にもなってみて、お互いが100%納得する答えは出ないかもしれないけど、理解して納得しようとするのが大切だと思いました。
- 今回のこともそうだし、これからも難しい問題が出てくると思うから、いろんな視点で物事を捉えたりしていくのも大切だと分かりました。今の段階でトラブルが起こっていない。起こってからでは遅いという意見を聞いて、自分の考えが変わりそうになったけど、私は変わりませんでした。トランスジェンダーの職員の人にとっては女性用トイレが使用できないことが嫌だと思うし、ほかの職員の人にもトラブルを起こしたくないのであれば、会社の中で全員が納得いくまで話し合えばいいと思いました。
- こういうことはまだいろいろ問題になっているけど、今の日本は全然そういう取組をしていないから、この裁判の結果は分からないけど、多目的トイレを使ったら…という簡単なことで終わらせるのではなく、『多数決』の話みたいに、深く考えればいいと思った。
- トランスジェンダーの職員が性転換手術をすればいいという意見が出たけど、それはお金だけでなく気持ちの面も関わるので、そんな簡単なことではなくて、最終的に答えは出せませんでした。だけど、そんな問題は話し合い、じっくり考えるのが大切だと思いました。両方の人の気持ちをしっかり考えるべきだと思いました。
- どちらかにしないといけないときに、自分の意見だけ主張し続けるのではなく、相手のことも考え、認め合うのが大切だと思った。分からないことを分からないままにするのではなく、分かるまで互いに考え続け、お互いが納得するまで話し合うのが大切だと思った。
- 私ははじめ、トランスジェンダー側を選んだけど、経済産業省側の意見を聞くと更に悩むことがあったし、経済産業省側を賛成するかもと思いました。『多数決』の時もあったように、他の意見を聞くこと、みんなが望むような結果に近づけることをよく考えられました。私は相手の立場になって考えたいと思いました。両者が納得するためには、話し合いを行ったり、そのことについて考え続けたりすることが大切だとよく分かりました。

* 『多数決』の授業

「中学道徳2」（光村図書）『民主主義と多数決の近くて遠い関係』の授業のこと。

前時にこの授業で、多数決の際に大切な3つのポイント（①好きな案ではなく好ましい案

②視点を変えてみる ③基準を明確にする）を学習した。

板書の様子



トランスジェンダーの職員	経済産業省
<ul style="list-style-type: none"> ・性同一性障害と医師の診断を受け、女性ホルモンを投与 ・性同一性障害について他の職員に説明会は行っている ・今のところは2階離れた女性用トイレを使用してトラブルになったことはない 	<ul style="list-style-type: none"> ・戸籍上は男性(性転換の手術をすれば戸籍も女性になる) ・男性として生活していた頃を知っている職員もいる ・他の職員の気持ちを考慮して更衣室・2階離れたトイレの使用を許可

めあて すべての人が生きやすい社会とはどのような社会か考えよう。

トランスジェンダーの職員

☆人の性別は自由なので、わざわざ遠いトイレに行かなければならないのは間違っている。
 ☆今まで女性トイレを使っていたら問題が起きたことがないので、近くの女性トイレを使っても問題ないのではないか。
 ☆女性ホルモンを投与までして女性として生きているので、男性トイレに入ると男性が困惑するのではないか。

解決案
 ☆問題が起きないと思うので、近いトイレを使用する。
 ○職場のトイレなので、職員全体に理解をもらえばいいのではないか
 (数多くでないで予想、もし多く出た場合は問題)

まとめ
 簡単な問題ではないからこそお互いに話し合い考え続ける。周りが無関心だと解決できない。

経済産業省

○他の人も使うので、男性が女性トイレにいる不安を持つ人は少なからずいるのではないか。
 ○女性用トイレの使用を禁止しておらず、様々なことを加味して別の階の女性用トイレの使用を許可している。
 ○男性の頃のことを知っている人はトイレで出会うと気まずいのではないか。

発言のルール

- ・根拠を明確にして発言をする
- ・話法をつかいつながりを持たせる
- ・ディベートではないので攻撃的な発言はしない
- ・相手の発言を認める姿勢をもつ

※ほかの人の意見を聞いて自分の考えが変わることは決して悪いことではない。

ワークシート

月	すべての人が生きやすい社会とは	組	番
日			

あなたはトランスジェンダーの職員側、経済産業省側どちらに賛成ですか。

〇感想

授業の様子



R5.12.20 2年道徳「すべての人が生きやすい社会」(性的少数者の人権) 職員の感想より

【1】①本時のねらいの達成、②生徒の様子や意識の変化、③授業の進め方・発問 など

A ①経済産業省側とT職員側との双方の視点について、偏りのないよう権利や主張の公平性を担保しつつ生徒への理解を促されており、本時のねらいは十分に達成されていたと思います。題材が題材なので、配慮や工夫をとくに要することが多かったと思いますが、**教員のスキルによって日に日によりよく洗練されたように感じました。②ペアトーク中に「これ難しいわ」と生徒のリアルな声が漏れたことから、生徒が自分事として懸命に考え、思考を巡らせている様子が伺えました。“生徒の心を揺さぶる作戦”は大成功を収めていたと思います。③事前の模擬授業によって、より良く熟成された授業展開でしたので、TVモニターや黒板の掲示物は視覚効果が効いてとても見やすかったです。板書の書き方も視点ごとに整理されおり(双方の意見は縦書きで、共通項目は横書き)、とても勉強になりました。真似してやってみたいと思いました。

それ以外のところでは・・・

◎子どもが困惑した顔をした時には「眉毛がグツとなったな」など、何気ない言葉掛けがあり、子どもの表情をよく捉えておられることが伺えました。普段の学級でのやりとりや雰囲気の和やかさを感じられました。

◎最後の「まとめ」のでは、教員側が想定していない意見が挙がったときに、前回の学習を想起させながら、望ましい見解を生徒から導き出そうとする展開が良かったです。指導者のテクニックの素晴らしさを感じました。

△子どもの意見を板書する際に、整合性がとれた内容だったかどうか少し気になりました。 ■

■教員のご助言のように“今、書いたことあっているか?”と生徒に尋ねられると良いと思いますが、自分も**教員の立場だったら、そんな余裕はないだろうなとも思います(難しいです)。むしろ、子どもの言葉をそのまま板書にするというのはいかがでしょうか?

△子どもが意見を立て続けに述べる場面では「～という意見なんだね。」「～という見方もあるよね。」「なるほどね。」「たしかにね。」「そうだよね。」等の受容的・肯定的な声掛けがあっても良いのではないかなと思いました。あるいは子ども意見をそのままオウム返しする等、子どもがせっかく挙げてくれた意見なので、付随するように教員の反応があれば自己効力感も感じられるのではと思いました。

△最後のまとめの発表者は、「ひとりに聞いてみよう」と1名に絞るのではなく、(予期しなかった回答が出た場合に)保険をかけて数名(2人～3人)に聞いてみる展開にした方が無難かもしれないと思いました。

B 生徒たちがとても楽しそうだけれど一生懸命考えているのが伝わってきました。1年生は楽しそうに授業は受けているけど、なかなか深く考えられなかったり、自分事として落とし込めなかったりするのが課題だと考えています。その点で2年生は、葛藤したり模索したりする姿が見られ、すごいなと思いました。

C 学年で授業を作ってきたことで本当に勉強になりました。生徒を揺さぶり、悩ませることが今回の大きな目標であったと思います。資料の提示、話す順番などを考え抜いたことが伝わってきました。生徒が授業の終わりに「難しい～」「決められない」などの言葉を口にしていただけの様子から、今回の授業は目標を達成することができたと思います。もう少し考えたかったのは、解決策の部分かなと思いました。時間もありませんが、手段だけでなく気持ちの面などの対応も生徒から出るように声掛けできればより良かったのではないかと思います。これから、僕自身もこの授業を生かし、生徒を悩ませ、揺さぶり、考える授業を展開したいと思います。

- D 生徒はよく考え、積極的に話し合い、真剣に解決策を導き出そうとしていた。性的少数者の方の立場になつたり、周りの人の立場になつたり、想像力を高めて深く考えられていた。「すべての人が生きやすい社会とはどのような社会か考えよう。」というめあてに迫るには、もう一押し必要で、多数決について考えた授業からの流れで、ねらいがこの授業のめあてと、二つのものから一つを選ぶという2本柱だったので、少々縛りが多かったかもしれないと感じた。
- E ①②時事問題をテーマに、今まさに社会でも議論が起きていることを、2-Aの子たちが自分なりの考えを精一杯表現しようとしているのが伝わってきました。オープンエンドの意見を一つにまとめるのではない形でも、よりよい社会をめざそうとする様子や他の意見を聞いて揺れ動く姿が見て取れました。③声量もあり、明るくでも真面目なこともきちんと伝えようとする**教員の授業の雰囲気は私にとってとてもいいと思います。物事に正しく向き合って考えようとする事の大切さは、まとめできちんと押さえられていたと思います。
- F 「～どのような社会か考えよう」というねらいについては迫ることができたと思います。生徒は「職員側」「経産省側」のいずれかの立場から変わることはなかったようですが、授業中に考えを巡らせることができたのではないのでしょうか。職員側も経産省側も無茶な主張をしているのではなく、理屈は通っているからこそどちらにすべきかという話ではない、「これをきっかけに日本を変えていく」といった*さんの発言を受け、広がりのある展開がありそうな予感がありました。授業後の生徒の「めっちゃ考えた。疲れた。」という声が、今回の授業のねらいを達成できた証拠だと思いました。
- G 本時のねらいは「悩みながら議論し、考えるきっかけにする」でした。子どもたちの表情、つぶやきを見ているとすごく悩んでいました。終わってからもずっと考え続けて「今日の道德、疲れた。」という生徒がいました。本時の目標は達成できたと思います。ただ、これからも人権教育（少数者を理解し、認めることの大切さ）を子どもたちに伝えていかなければならないと感じました。
- H しっかりと準備・研究されていることが分かりました。学年でも事前の学習や打合せをされており、学年全体のものになっていると思います。人権教育は、みんなで考え共有し、次につなげることが大事だと再確認しました。生徒も個人での葛藤、ペアトーク、クラスでの共有など、段階を踏んで日頃の取組が生かされていたと思います。温かい雰囲気もよく感じられました。
- I 現在進行形の裁判をもとに進められ、新しい試みであると同時に扱い方が難しいかと思いました。めあてにある「すべての人…」の「すべて」とは何を指すのか、どの範囲を指すのか？
- K どちらかを決めるところでとても考えていて、価値観を揺さぶることができていた。相手の気持ちを考え、理解しようとすることができていた。自分の意見を持ち、他の意見を受け入れ、さらに良い方法を考えようとしていたのが良かった。課題となっている教材から身近な問題に目を向けさせるように発問したり、話し合わせたりできるようにしていきたいと思った。
- L どちらの立場に対しても平等な立場で説明することが大切であったが、少し偏りが出てしまった。ただ授業後まで悩み続ける生徒の存在があったことは、このような課題に対し、学び続ける態度の一つとしてねらいが達成できていた。
- M 「自認する性別に即した社会生活を送る重要な法的利益」か「適切な職場環境を構築する責任」か…。二つの正義の中でより望ましい社会をめざして考えるという、生徒にとってしっかり考える1時間となったと思う。「日本が変わっていくきっかけ」と考えを述べた生徒がいるように、LGBTQなどマイノリティの方々への理解を今後も続けていく一歩となったと思う。
- N 「性的少数者の人権」に関する授業と聞いていたのですが、予想とは全く違う授業でした。互いの権利が対立する場合、より良い解決を図る際に何が大事かを考えさせる授業であったと思います。そうであ

れば生徒の真剣に悩み、考える様子から、ねらいは達成できたと思います。ただ「少数者の人権」となった場合には、少し物足りなさを感じたのも事実です。人権を侵害されていると感じる人は、多くの場合少数者です。もしこの問題が身近な人であったら自分ほどの立場に立つのか？と考えられる第2弾の授業が見てみたいと思いました。

【2】研修後の感想(今年度の取組についてや今後の課題など)

- A 主題設定の理由である“本学級の生徒は～・・・生きやすい環境になるためには”について考えるきっかけにしたい。”までの文章がとても秀逸で、可能であれば元データをいただきたいと思う程でした。学校によっては、LGBTの内容を保健指導や保健学習で扱うこともありますので、ぜひお願いします。今回の授業研を受けて、これまでに保健室でFTMや同性愛で教育相談にあたった生徒がいたことを思い出しました。とくにトイレ使用については、生徒目線で考えてあげられていなかったと反省する機会にもなりました。このような問題を改めて自分事として考えていくためのきっかけをいただいたと感じています。
- B とても難しい内容だと感じました。授業だけでなく折に触れて教える必要があると思います。
- C 教員2年目ということで、去年と同じ取組ではなくレベルアップしようと思って取り組んできました。実際には思った通りに行かず、頑張る生徒に助けられているというのが現状だと思います。来年は生徒会などリーダーを引っ張っていくことが考えられます。その中で人権に対する取組は普段の指導が大きく影響すると思います。初歩に帰り「当たり前を当たり前」できるように、引き続き生徒と共に日々取り組んでいきたいと思っています。
- D 相手の立場に立って考える力、想像力を高めていくために、教員自身が様々な立場について深く理解し、想像力を持っていくこと、生徒たちに常に見えにくい困り感やがんばりについて想像させるような働きかけを続けていくこと、多様性を認め合う雰囲気を作り続けていくことが大切と感じた。
- E 直接今回の内容に関わることではないのですが、目を見て話を聴くことはもちろん、一部の子たちは資料に目を通しながらも、**教員の解説や問いかけに自然とうなずく様子があり、2年生の聴く力が伸びているのだと感じました。人の話が聞けることから、話す(伝える)力も育つと思います。話法という形式的な話す力を高めるだけでなく、人が意見を言いやすい教室環境づくりも人権を大切にするために重要なところだと思います。2-Aにはそれが教員にも生徒にもあると感じました。
- F 人権を大事にする文化、人権の視点を持った文化を創造していく、していける学校を作り上げるためには、空気のように人権がある状況を作っていくことが大切だと思います。日々の小さなことから、生徒のつぶやきを出発点として人権が話題となる青垣中をめざしてください。
- G 今回扱った問題は、日々生活しながら考えていかなければならない問題です。道徳の授業だけでなく、HRで話すことであったり、指導の中で人権に触れて伝えてみたりすることが大切だと思いました。
- H 様々な人権課題がある中、今までやってきた人権教育をふり返り、精査することが大切ではないかと思っています。ただ、世代交代もあり、例年通りにはいかないなので、研修を通して学び直し、今の時代に合うように工夫していくための時間があつたらと思います。生徒同様に私たちも個を高め、教職員でも意識を高めていかないといけないと思います。この研究をよい機会として…
- I 改めて人権教育はすべての教育活動を行われていることが再認識できました。今後、どの立場の人の人権を特に守るべきなのか(尊重すべきなのか)考えていかないと、何かまとめがぼやけてしまう気がします。

- K 1回きりでなく、いろいろな角度から人権問題を学習することを継続していかなければ、自分自身の問題として考えさせることができないと思った。まずは知ることから始め、自分のこととして考えさせ、どのように行動していくかを段階的に進めていくことが必要だと思った。
- L こうして全体で授業を参観し、交流できるのはとても良いことだと思う。また、だからこそ学年で事前に研修を重ねることができたのもみんなの財産になった。今後は事後研を継続し、その時の議論の柱が研究のテーマになるようになれば、よりよいと考える。
- MA・B 共に担任が創意工夫し、学年で放課後遅くまで模擬授業を行うなど、取組として意義深いものがあった。今後も道德の授業において、単なる徳目的なやり方ではなく、多くの人の多様な考えを引き出し、互いを尊重し合える…人権視点の取組を展開していきたい。
- N 今年度は、「外国人」「障害者」「高齢者」「性的少数者」の人権について、自分がその立場だったら…と困っていることの実体験を通して考える授業を見せていただきました。人権について考えることは、相手の立場に立つこと、相手を思いやることから始まると思います。そのためにも今日の授業のように、多くの人にとってのより良い解決策を、話し合いによって見いだせる生徒の育成が、様々な場面で行われるようになったらいいと思います。そして、人権に対する意識が思いやりある言葉や行動として実践できるようになってほしいと願います。